

目次

巻頭言：外科医たること、とその教育	1
I 教室人事	2
II 教室員のひとこと	3
留学報告	9
III 診療の集計	
1. 外来および入院	11
2. 手術	12
IV 研究業績	
1. 論文発表	13
2. 学会・研究会への参加	14
3. 研究助成	18
4. 受賞	18
5. 学位	19
V 教育関連の活動	
1. 学生実習	19
2. 卒後臨床研修	19
3. 講演・講義	19
4. セミナーの開催	19
5. 小児外科・病理カンファレンス	20
6. 抄読会	21
VI その他	22
付. 「第1回埼玉県東部地区小児救急医療研究会」開催案内	
「第99回東京小児外科研究会」プログラム	
編集後記	

* 表紙はフランクフルトの大聖堂（ドイツ）

巻頭言：外科医たること、とその教育

獨協医科大学越谷病院

小児外科教授 池田 均



外科医を一生に渡り続けること、しかもアクティブに続けること、これはそう簡単ではありません。体力的な問題もありますし、また管理職になって已む無く第一線から退くこともあります。医学部を卒業以来の同僚や友人の中には「外科はもう飽きた」と言って転身する者もおります。幸い、私の場合、まだまだ外科医としては精進の身と思っておりますので、もう少し外科医を続けようかと思っております。想えば「ベン・ケーシー」や「外科医ギャノン」に憧れ、自分に向けた職業として小児外科医を選んで二十数年以上が経ちました。

最近、どこの大学でも外科系を選択する医師が激減していると聞きます。全国的な傾向で、外科学会や小児外科学会でも如何に若い医師をリクルートして育てあげるかということが重要な課題になっています。昨今の若い人たちにとって外科医はもはや憧れの対象ではなく、むしろ敬遠すべききつい職業との感が強いようです。ですから医学生や研修医に外科医や小児外科医としての道を選択するよう動機付けをすることは容易ではありませんし、一度、門をたたいて入ってきた人間は貴重な人材としてややもすると過保護に扱われすぎるきらいがないわけでもありません。

外科医として一人前になること、これはそう容易いことではありません。当然、数多くの手術を経験する必要があります。手術の前日にはシミュレーションし、場面場面での指先の動きを覚えておかなければなりません。「外科医ギャノン」ではテープを聞いてイメージ・トレーニングしておりましたし、財前五郎は空に向けて指先から両手の舞をするわけです。私は昔から後輩に手術をするのは能役者が舞台にあがるのと同じだと言います。全身全霊を込めて能舞台である手術台の前に立てということです。大仰な言い方ですが、手術の完成度を高めるには一定の緊張感と集中力が必要で、当然、手術の完成度は手術の結果に反映します。ですから準備不足であれば有無を言わず降板させられることになるわけです。

こんなわが手術場での指導も後輩の育成・教育と呼ぶには決して十分なものではないかもしれません。そのためか当科の教室員もそれぞれに自己研鑽と努力を重ね、何とかこの一年を切り抜け、ご覧のような年報を纏めるにいたりました。どうぞ私たちにとって貴重な外部評価ならぬご批判をいただけますよう、心よりお願いする次第です。

I 教室人事

2006年3月31日付で山岸純子助手が退職し、群馬中央総合病院外科へ移動となった。4月1日から畑中政博君がレジデントとして小児外科チームの一員に加わった。したがって院内は4月以降、池田、石丸、田原、大谷、畑中の5名の体制となった。高安 肇講師は前年より引き続きアイルランド、ダブリンの Our Lady's Hospital for Sick Children, Children's Research Centre へ留学中であり、学内助手藤野順子君は前年と同様、八潮中央総合病院へ学外派遣中である。

非常勤講師はこれまでどおり、群馬県立小児医療センター形成外科部長浜島昭人先生と社会保険船橋中央病院形成外科部長蓮見俊彰先生に形成外科の外来診療、手術、教育を担当していただいた。さらに群馬県立小児医療センター外科部長黒岩 実先生と埼玉県立小児医療センター外科医長内田広夫先生には引き続き非常勤講師としてそれぞれ鏡視下手術の教育と研究指導を担当していただいた。



2006. 4. 1 病院前



研究室にて
(秘書の菊地さん、長嶋さん)

II 教室員のひとこと

「2006年を振り返って」

石丸由紀

2006年、TVやニュースでは産科医や小児科医の人手不足と、それに伴う地域の医療体制の後退、医療訴訟の増加が報道されていました。医師の不足を訴える一方で医療訴訟については辛辣に報道する。これではどんな医師でもモチベーションが低下します。勤務医の数の減少により、残された医師達はさらに過酷な勤務状況に陥り、それに伴いミスも増加、医療訴訟をおそれ、さらに医師がやめてゆく。患者が医師に要求するレベルは高く、それにより求められる責任も大きくなっています。これは市中病院だけの話ではなく、大学病院でも状況は同じです。新しい研修システムでは研修医やレジデントは多くの科をローテーションするため、小児科や産科、外科など目立って忙しそうなのは研修期間終了後の進路として敬遠されがちです。若い働き手である新入局者も減り、残った医師を守るために大学の医局は派遣先を減らし、その影響で市中病院は小児科や産科の診療を取りやめるところが増えてきました。地域の住民は十分な医療を受けられず、遠隔地の病院へ通院するしかなくなる。緊急の際の対応も遅くなる。集約化といえそうかもしれませんが、結果としてそうなただけで建設的で計画的なものとは違う気がします。

最近の若い医師は、自己犠牲によるやりがいや充実というものより、生活さえ安定していれば当直が少ない、忙しくない、将来の開業に役立つ等の理由で入局先を決めるように見えます。このような若い医師達がすすんで忙しくて訴訟の多い職場に行こうと思うでしょうか。若い医師の入局の減少は大学の医局の衰退を招きます。どうしたら若い医師が忙しい科に入局するようになるのでしょうか。

まず一つは、治療のエビデンスを明らかにし、患者様に開示してリスクをよく理解していただくことではないでしょうか。例えば、産科に受診する妊婦に関しては妊娠中の異常がなければ病気ではないとして保険が適応になりません。ほとんどの人が妊娠はおめでたいことであり、胎児や妊婦の死亡に至るようなリスクのことは考えていないでしょう。妊婦を不安に陥れるようなことはよくないとは思いますが、妊娠末期までには妊婦や家族に出産のリスクについて説明し、よく理解していただく必要があると思います。

次に、勤務医の給与体系を見直すことです。仕事をしてもしなくても同じ時間だけ院内にいれば給与は同じ。一生懸命働いただけの見返りがなければ働いた甲斐が感



じられないと思います。上司などによる仕事の評価を行い、基本給に加算するようなシステムにすれば、仕事ぶりを評価してもらえたということから、やりがいを感じるができるようになると思います。

そして、教育システムの充実です。医局員の少ないところでは日常の診療に追われて通常業務以外のことを研修医やレジデントに教えるところまで手が回らないかもしれません。しかし、幅広く研修先を選択できるようになった現在、すでに研修医となった先輩やインターネット、説明会での情報をもとに研修医は研修先を選びます。また、同じ病院内でもスーパーローテートする研修医達は各医局を比較します。つまり、他の病院だけではなく、院内の他の医局も研修医を取り合う相手というわけです。このような状況の中で、いかに自分の科がよく教育を行っていて、実践もさせてくれて、多少忙しいかもしれないけれど非常にやりがいがある科であるということを、特に身近なレジデントや助手クラスの医師達が自ら語ると、非常に説得力があるのではないのでしょうか。ただし、教育に携わる医師は診療と同時に研修医を教育してゆく必要があり、この手間や時間をできるだけ惜しまないように意識してゆかなければなりません。

医師の不足と偏在はかなりせっぱ詰まったところまで来ています。厚生労働省ももっと研修医の意見を取り入れるなど現実に沿った医師不足の解消策を早急に練るべきでしょう。

「奪われた？未来」

田原和典

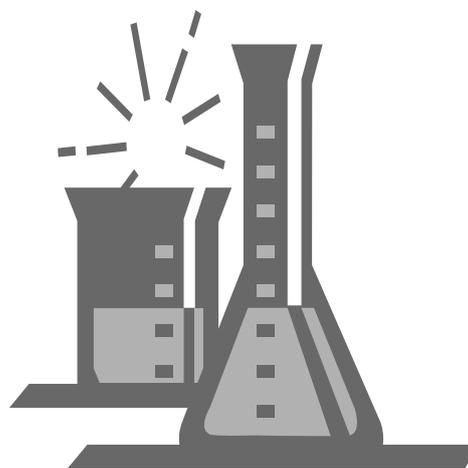
ドイツから帰国して2年が経過した。家族と一緒に過ごす時間が濃密であったドイツの生活を、時折懐かしく思い出すこともあるが、言語に不自由のない生まれ育った母国の生活というものは、やはり安心できるものである。そんな生活に戻ってみると、現在の日本は、ありとあらゆることに快適さと便利さを追求している国であると感じさせられる。特にコンビニエンスストアの充実度は大変なもので、そこに行けばあらゆる食料・飲料品が手に入り、お金もいつでも下ろすことが出来、便利と叫ぶところではない。そしてこれまでの私は、そんな生活を享受し、何の抵抗感も感じなかった。しかし最近環境問題がクローズアップされだし、それに刺激されたことにより私の考え方は少しずつ変わり、この生活を続けていく未来に一抹の不安を抱くようになった。

小児外科医として日々診療することで最近感じているのだが、私が研修医であった頃の13年前と比べて、最近停留精巣の症例数が増えているような気がする。そこで実際に当科での停留精巣の症例数について調べてみた。当科での2004年、2005年の外来患者総数における停留精巣（移動性精巣含む）の割合は約2%と差はないが、手術症例数では、2004

年が 5.6%、2005 年が 7.4%、2006 年が 9.5%とわずかながら増加傾向が見られた。

果たしてこれは何を意味しているのでしょうか。たしかに医療は進歩し、人間の平均寿命は延びた。しかし実は人間は生物学的に弱体化してきているのではないか。このようなことを考えていた時、昔読んだ 1 冊の本を思い出した。2001 年に日本語翻訳版が出版された「奪われし未来」という本である。この本では、日常よく使われるプラスチックからしみ出た合成化学物質（この合成物質はエストロゲンに類似した作用を持っている）が、ホルモン作用を攪乱し、人間の生殖能力を低下させると指摘している。このエストロゲンの男性に及ぼす影響は以前より問題視されており、1993 年医学雑誌 LANCET に“男性の精子数の低下と生殖器の奇形は、胎内でエストロゲンに暴露した結果である。”という論文で、出生前に天然あるいは人工合成エストロゲンに高い濃度でさらされた男児には、精子数の低下・精巣下降不全・精巣腫瘍などの増加が見られると報告されている。つまり普段何気なく消費している物（プラスチックに接触している食料・飲料品）によって、我々の生殖能力に異常が生じている可能性が高いのである。もちろんこの物質がすべての原因とはいえ、生殖学者の中には、精子の異常は生活スタイルの変化が原因とする者もいる。しかし最近の精子に関する研究では、たばこや汚染物質等の後天的な要因よりも、胎生期の発育環境の方が重要とされている。そうすると私が感じている精巣関連症例の増加というのは、この人工合成物質の影響が関係している可能性が高いということになる。後天的要因ではなければ、これまで微量で問題とならなかった合成化学物質が、時間を経て我々の中に蓄積し、ついにはその影響が今の世代に発現し始めたということであろうか。

こうした人類への脅威は、快適さ、便利さを追求したがためにうけた代償であり、その影響がこれからの世代つまりは子供達の未来におよぶことを考えると、父親としても小児外科医としても不安を感じざるをえない。



「走馬燈」

大谷祐之

2003 年、私はこの病院で研修することとなった。たくさんの子供たちの診療に携わり、諸先生方から子供たちから学んだ。そして3年と4カ月の月日が流れ、この3月にひと区切りをつけることとなった。思い返すと本当にいろいろな事があった。そしてそれらの事が走馬燈のように記憶の中からよみ返し、駆け巡ってゆく。

12月1日、一般外科修行を終え、初の小児の外科へ。何もかも覚えず、一から教わった。一日のworkをみっちりたたき込まれた。小児を扱う特異性、それまでとの大きなgapを実感させられた。小児病棟での仕事、外来、一人当直、そして何より手術手技の違いに戸惑うばかりだった。隣町の蒲生に初の独り暮らしを始めたのも、てんてこ舞いに拍車をかけた。小児を始めると往々にして体験するという発熱と体調不良を起こし、デビュー戦となる病棟忘年会の日には点滴を受け、用意したステージ衣装はお蔵入りとなった。

2004年、大阪での総会発表を皮切りに、学会・地方会の経験も徐々に積み重ねていった。毎度のこと着手・準備が遅くいっぱいいっぱい、御迷惑をおかけした。ある症例の経験から、香港で開催されたアジア小児外科学会で示説を行った。初の国際学会の緊張で、100万\$の夜景を観る余裕は皆無であった。後に本症例をJPSに報告することができた。

2005年、仙台盛岡の学会2タテ。準備でダウンし牛タンを食べそびれ、盛岡三大麺のワンコ・冷・じゃじゃの麺3タテを食べダウンした。三大阿波踊りの一つ、南越谷阿波踊りに獨医連の一員として参加、最後に連提灯持ちをさせて頂きTVカメラにも映った(地元ケーブル)。秋に木崎先生が突然亡くなられた。一緒の期間は短かったが、派遣中も密に連絡をとり遅くまで語り明かした友だけに、未だに信じられない。年末の大晦日当直は毎年、私が年越した。恒例となった他科の先生方との年越し鍋、美味しく暖まっていると外来callが鳴るのも恒例だった。

2006年、私個人的にも激動の年であった。お見合い話もよそに、駅で一緒にいるところをフライデーされた彼女と、結婚した。企画したイースター島旅行だが、妊娠初期の安静のため、かねてよりの夢だったモアイを見に単身飛び立ったことは、今も言われる。そして我が家に新しい家族が誕生した。生活の流れが目まぐるしく変化した。小児医として身内の側で子供を直感するという特別な意味も感じた。9月に諸先生方をお招きして私達の結婚式をとり行った。ゲストハウスweddingの準備に凝って大変だったが、皆に集まって頂いて最高の思い出となった。冬には初の医局旅行、塩原温泉バスツアーが開催。

日々の中では本当にたくさん的小児、そして手術を経験させて頂いた。鼠へ鼠へ鼠へ！毎日のルーチンの流れは深過ぎるほどしみついた。その間あいだで大きな手術も経験した。

悲しい事もあった。難しい治療方針に深く悩み、そして患児家族と共に術後管理に苦渋した幾つもの命を決して忘れることはないだろう。元気になって退院し、成長し、やがて外来で「大きくなったねェ」と会える時に、小児外科医になって良かったと思う。以前、本業績集に「ひくひと」という文を寄稿した。概して私の当直は緊急が多く忙しかったが、それは自己のブラシアップとなるチャンスだったと言い換えることができる。

2007年、4月から日赤医療センター小児外科に異動することが決まった。3月、春の訪れと卒業の季節という周囲の雰囲気も加わって、いよいよ自分の獨協とのお別れという実感が増して、本当に寂しい。今回書き綴った思い出の数々が、走馬燈の如く駆け巡ってゆく。いつも私が節目に言う言葉がある。出会いは獨協でも、人としての心のつながりは、決して今回で終わってしまうものではない。これからも獨協でたくさん学んだ経験を糧に修練を続け、いつか成長して再会できたらと思う。

「スローンチャ(Slainte)!!」

畑中政博

小児外科に入局し1年が経ちました。あっという間の1年だった気がします。連日の緊急手術、学会発表等々疲労困憊した私の心の支えとなったのは、妻や息子の笑顔は勿論ですが仕事帰りの一杯(いっぱい?)のビールにもだいぶ支えられた気がします。

一口にビールといっても世界には何千種類ものビールがあります。歴史も古くその起源は紀元前3500年~3000年のメソポタミヤにあるというのが定説になっています。その根拠はシュメール人が楔形文字を用いビールについての存在を書き残していたことによります。またメソポタミヤ地方(現在のイラク)は農産物、特に小麦がよく育つ農作地帯として紀元前1万年くらい前から耕作の歴史があるとされていることから、ビールの起源もその頃ではないかとする説もあります。また紀元前2300年頃のエジプト文明の壁画にはビールの製法が実際に描かれています。そんな昔に飲まれていたビールは勿論冷蔵庫もないわけですからぬるいビールであり、現代のビールと味も香りも全くの別物であることは想像に難くないかと思えます。ビールはぬるい方がうまいと力説する方もおられますが、現代のビールの殆どは昔の製法とはやや違ってある程度冷えた状態でないとおいしさを感じることは難しいかと思えます。あえてぬるいビールを飲むとするならば、私が実際試したものの中ではギネスビール(エール)などがよいかと思えます。真っ黒な独特の色と焦がしたような苦みが後に残る印象があるギネスビールですが、常温で飲むと苦みは消え麦独特の甘く香ばしい香りになります。一言で言えば「飲むパン」。ちなみに英国やアイルランドでは患者さんの体力回復のためにギネスが一役買っていたとか。

色や味も様々なタイプのビールが世界各国でつくられています。発酵の根幹をなす酵母のタイプによって上面発酵(エール)、下面発酵(ラガー)、自然発酵(ランビック)の3つに大別でき、そこからさらに20種類近くに分類されます。エールビール、ラガービールなど名前ぐらいは聞いたことがあるかと思いますが、ラガーってどんな意味?こんな疑問を持った方は私だけではないと思います。もともとはドイツ語で「貯蔵」を意味します。上面発酵のビールに比べ、下面発酵のビールは低温で長期期間醗酵をしなければいけません。冷蔵技術のない時代は、寒い国でもほんの一定期間しか作ることができませんでした。上面発酵や自然発酵は紀元前から、下面発酵は15~16世紀頃に始まったとされています。現在世界中で飲まれているビールの9割が下面発酵のラガービールでもピルスナーと呼ばれる種類であり、日本のビールも無論この種類に殆どのものが当てはまります。では、このピルスナーと呼ばれるビールはいつ頃からあったのでしょうか。時代は1842年11月。チェコのピルゼンというところで生まれた「ピルスナー・ウルケル」が始まりで、当時人気のあったミュンヘンの濃色系ラガービールをピルゼンで造ろうとしたところ、水質の違いから偶然黄金色に輝く淡色系ラガーができたのです。一般的にヨーロッパの水はミネラルを多く含んだ硬水が多いのですが、ピルゼンではたまたま軟水の水が噴出しており、それがビールの色ばかりではなく喉ごしもすっきりとしてキレが良く爽やかな味わいにしてくれたのです。真っ白なヘッド(泡の冠)に乗った黄金色のそのビールは瞬く間に世界中に広まり、近代ビールの基礎となったわけです。こうして、メソポタミヤやエジプトのビールから数えて約5000年。今日のビールの原型が出来上がったのです。

まだまだビールについて書きたいことは山ほどありますが、少しは医学の勉強もしなくてはいけませんので、今回はここまでとします。それでは今日一日の無事と新しいビールとの出会いに。Slainte!!(スローンチャ、ゲール語で乾杯の意)。



留学報告

高安 肇

留学させていただいてから1年半が過ぎました。それなりに成果が上がり、1年余で3本の主著論文と2本の共著論文の掲載が確定しました。また、2006年はプレム教授が英国小児外科学会国際大会で最も荣誉あるデニスブラウンメダルを受賞（現役教授初の快挙）など華やかな一年となりました。本報告ではダブリンのとある一日を例に、私の留學生活の様子を垣間見ていただければと思います。

9月下旬の火曜午前6時30分起床、自転車でラボに向かう¹⁾。空はまだ暗い。サマータイムの終わりが待ち遠しい²⁾。夜の雨が上がり、空には虹が出ている³⁾。7時30分にラボに到着、プレム教授に進捗状況を報告⁴⁾、ヒルシュスプルング病疑いの検体の染色の結果を供覧、診断レポートを作成する。コンピューターワークを終え午前9時にトリニティー大学⁵⁾へ自転車で出発、実はプロテスタント（正確には英国国教会）のセントパトリック大聖堂⁶⁾を横に見ながら市街中心部の雑踏に紛れ込む。

大学構内に入り、ケルズの書⁷⁾見学のための行列を横に動物学教室へ向かう。石造りの古い建物と緑の芝生⁸⁾が調和したキャンパスはとても気持ちが良い。動物実験の準備を整えて市街北部のボーモント病院へ出発。右手にカスタムハウス、左手にオコンネル橋の雑踏を眺めつつリッフィー川⁹⁾を越え、バス停に向かう。バスの二階¹⁰⁾からジョージアン形式の長屋、色とりどりのドア¹¹⁾の眺めを楽しむ。ボーモント病院動物舎ではスペイン帰り¹²⁾のスタッフがご機嫌に迎えてくれた。

動物実験を終えてバスに乗り、オコンネル通りでおりる。パブの前でたむろする人、観光客、買い物客でごったがえす雑踏の中、乱暴な運転のダブリンバスがうなりをあげて走り去る。トリニティー大学の実験室に戻り、大学院生に混じって実験を開始する。FMからはご機嫌な音楽に混じって北朝鮮核実験のニュースや有識者による日本でバブルが崩壊したときのエピソード¹³⁾などが流れてくる。午後4時30分に「下で5時からパーティーがあるから出ない？」と声をかけられる。急いで実験を終えて5時30分に一階のキッチンへ向かう。ギネスビールやワイン片手の人たちと歓談し、6時30分に自転車で1時間の帰路に着く。すでに満席のパブと人で溢れかえるショッピングセンターの横を抜け、運河を越える。朱色に色づいたダブリンマウンテンが見えてくる。今日は女房がアダルトナイトスク

ール¹⁴⁾に通う日、息子と留守番をすることになっている。自転車をこぐ足に力が入る。こうして家族とゆっくりと過ごせるのもあとわずか、残りの期間を悔いの無いように過ごさなくてはと改めて思う。

最後になりましたが留学にあたり、色々のご配慮くださった皆様にあらためて感謝申し上げます。

筆者註：

- 1) 車を家族に残すため、苦しい家計の中ガソリン代を浮かすため、そして健康のため一日 20km ほど自転車をこいでます。
- 2) 日照時間の変化に伴い 11 月から時計を 1 時間遅らせる。切り替えの日は 1 時間寝坊が出来る。
- 3) 空気の綺麗なアイルランドの特徴。虹のもとには妖精がいると言われている。
- 4) この機会（火曜早朝）を逃すと多忙なプレムに会えない事が多い。
- 5) 1592 年創立のアイルランド最高学府。8 月から共同研究を開始しました。
- 6) ガリバー旅行記で有名なジョナサンスイフトが眠っている。カトリックの国、アイルランドだがイギリスに統治された歴史を持つために壮麗な聖堂はほとんどがプロテスタントのもの。
- 7) 8 世紀の挿絵が綺麗な聖書の写本、国宝。図書館に展示されている。
- 8) 暖流のおかげで冬の気温は熊本と同じくらい、年中芝生が緑の国です。
- 9) 市街を東西に流れる川。この川の水でギネスビールが作られているという噂は嘘。
- 10) ほとんどのバスが二階建て、ロンドンの影響か。もっともロンドンでは安全上の問題から二階建てバスの廃止が決まったようです。
- 11) 酔っ払った主人が家を間違えないようにドアの色を塗り分けている。
- 12) こちらの人は年に 6 週間の有給休暇を持ち、南フランスや南スペインにバカンスにしばしば出かける。
- 13) アイルランドは今にバブルがはじけると言われ続けていて、まだはじけていない。
- 14) こちらの人は大人になっても何か習い事を続けるらしく音楽、語学、ダンス、ヨガ、料理など色々な教室が週に一度地域の学校を借りて行われている。

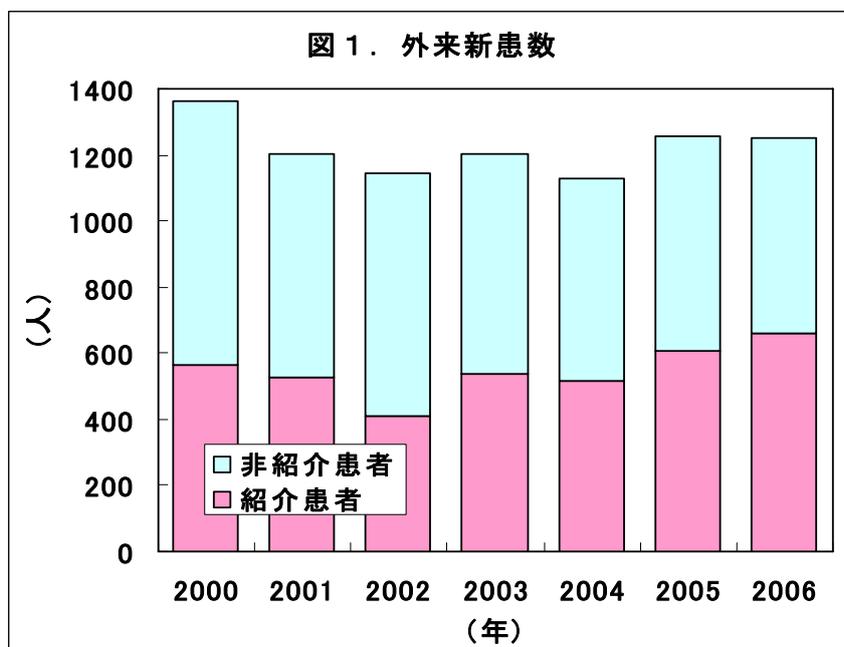


セントパトリック大聖堂

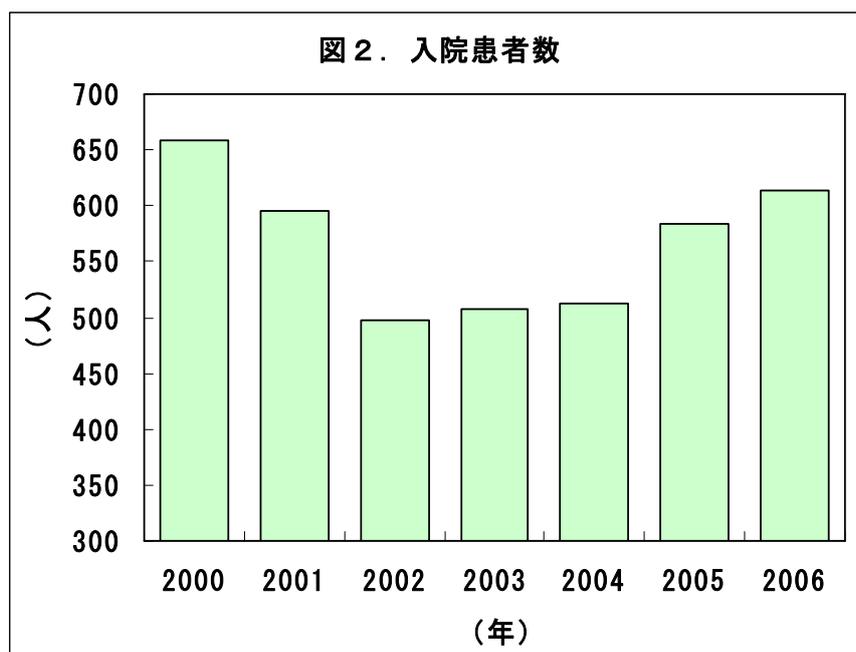
Ⅲ 診療の集計

1. 外来および入院

2006年の外来延べ患者数は5420名、うち新患者数は1250名でその紹介率は53.0%であった(図1)。

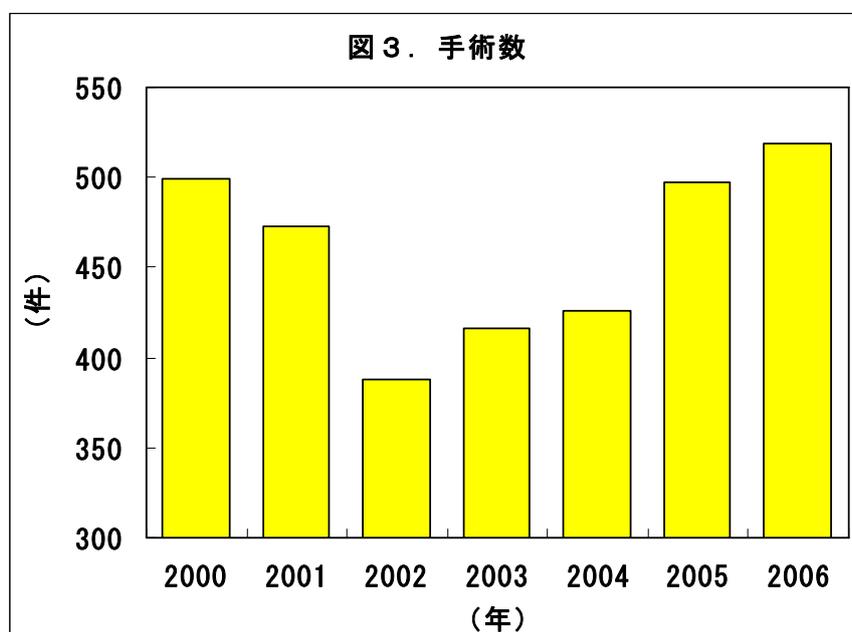


一方、2006年の入院患者数は614名、うち新生児入院数11名であった(図2)。



2. 手術

2006年の手術数は519件、うち新生児手術数8件であった(図3)。



IV 研究業績

1. 論文発表

「原著」

- 1) Ikeda H, Ishimaru Y, Takayasu H, Fujino J, Kisaki Y, Otani Y, Yamagishi J, Tahara K. Efficacy of granulocyte apheresis in pediatric patients with ulcerative colitis: A pilot study. J Pediatr Gastroenterol Nutr 43:592-596, 2006
- 2) Okamura K, Yamamoto H, Ishimaru Y, Takayasu H, Otani Y, Yamagishi J, Nagashima K, Takahashi A, Kuwano H, Ikeda H. Clinical characteristics and surgical treatment of perianal and perineal rhabdomyosarcoma: Analysis of Japanese patients and comparison with IRSG reports. Pediatr Surg Int 22:129-134, 2006
- 3) 山岸純子、石丸由紀、高安 肇、大谷祐之、池田 均：肥厚性幽門狭窄症における臍部弧状切開の検討。日臨外会誌 67:13-17, 2006
- 4) 高安 肇、山岸純子、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：小児の予定小手術における術前ルーチン検査の有用性に関する検討。日小外会誌 42:6-10, 2006

「症例報告」

- 1) Takayasu H, Ishimaru Y, Tahara K, Otani Y, Yamagishi J, Ikeda H. Splenic autotransplantation is an option of treatment for congested and enlarged wandering spleen with torsion: Report of a case. Surg Today 36:1094-1097, 2006

「著書・総説・その他」

- 1) 池田 均：臍芽腫、「小児慢性疾患診療マニュアル」、診断と治療社、pp83-84, 2006
- 2) 池田 均：肺芽腫（胸膜肺芽腫）、「小児慢性疾患診療マニュアル」、診断と治療社、pp84-85, 2006
- 3) 池田 均：がん、白血病、腫瘍性疾患：肝腫瘍、「今日の小児治療指針」第14版、医学書院、pp433-434, 2006
- 4) 池田 均、山本英輝、岡邨香織：横紋筋肉腫の組織分類と病態。小児外科 38:641-645, 2006
- 5) 田原和典、大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、池田 均：ダウン症候群・血小板減少(TAM)を合併した十二指腸閉鎖症の一例。第97回東京小児外科研究会抄録集 37:69-72, 2006
- 6) 大谷祐之、畑中政博、山岸純子、石丸由紀、田原和典、高安 肇、池田 均：腫瘍形成性虫垂炎に対する primary appendectomy と interval appendectomy の比較検討。第98回東京小児外科研究会抄録集 38:35-38, 2006

2. 学会・研究会への参加

「口演発表」

- 1) 山岸純子、石丸由紀、大谷祐之、田原和典、高安 肇、池田 均：高度な腹腔・胸郭低形成をともなう ruptured omphalocele の 1 例。第 43 回埼玉県医学会総会、2006. 1. 15、さいたま
- 2) 山岸純子、田原和典、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：腹部原発悪性リンパ腫 3 例の経験。第 12 回群馬小児がん研究会、2006. 2. 10、前橋
- 3) 石丸由紀、大谷祐之、山岸純子、田原和典、池田 均：重症心身障害児における誤嚥のコントロール。第 36 回日本小児消化管機能研究会、2006. 2. 18、湯沢
- 4) 大谷祐之、田原和典、石丸由紀、山岸純子、畑中政博、池田 均：貧血を契機に発見された胃腫瘍の 1 例。2005 年度関東甲信越地区小児がん登録研究会、2006. 2. 25、東京
- 5) 田原和典、高安 肇、山岸純子、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：自家脾移植を行った遊走脾捻転の術後経過（第 2 報）。第 19 回日本小児脾臓研究会、2006. 3. 4、東京
- 6) 中井秀郎、木原敏晴、新井 学、北原聡史、安田耕作、山岸純子、石丸由紀、田原和典、池田 均：両側性巨大腎芽腫に対する腎温存手術、第 94 回日本泌尿器科学会総会、2006. 4. 12、福岡
- 7) 大谷祐之、田原和典、畑中政博、山岸純子、石丸由紀、池田 均：小児の尿膜間遺残症に対する腹腔鏡下切除術の経験。第 42 回埼玉県小児外科症例検討会、2006. 5. 9、川越
- 8) Nakazawa N, Takayasu H, S Montedonico, F Paradisi, P Puri. Lung hypoplasia in the nitrofen rat model is the result of nitrofen-induced suppression of retinoid system. The 7th European Paediatric Surgeon's Association, May 10-13, 2006, Maastricht, The Netherlands
- 9) 小山田幸枝、中井秀郎、石丸由紀：二分脊椎患者の排泄障害に対するアプローチの検討。第 20 回日本小児ストーマ・排泄管理研究会、2006. 5. 27、横浜
- 10) 山岸純子、中井秀郎、石丸由紀、田原和典、大谷祐之、池田 均：巨大腎芽腫に対する腎温存手術：新たな腎芽腫治療戦略の可能性。第 43 回日本小児外科学会総会、2006. 6. 7-9、秋田
- 11) 大谷祐之、石丸由紀、田原和典、山岸純子、高安 肇、池田 均：腫瘍形成性虫垂炎に対する primary appendectomy と interval appendectomy の比較検討。第 43 回日本小児外科学会総会、2006. 6. 7-9、秋田
- 12) 大谷祐之、畑中政博、山岸純子、石丸由紀、田原和典、池田 均：腫瘍形成性虫垂炎に対する primary appendectomy と interval appendectomy の比較検討。第 98 回東京小児外科研究会、2006. 6. 13、東京
- 13) 大谷祐之、畑中政博、山岸純子、石丸由紀、田原和典、池田 均：ワークショップ「腸

- 重積症の診断と治療」：小児の腸重積症の検討。第 20 回日本小児救急医学会、
2006. 6. 16-17、つくば
- 14) 畑中政博、池田 均、山岸純子、石丸由紀、田原和典、大谷祐之、中井秀郎：両側性巨大腎芽腫における術前化学療法と画像所見。第 42 回日本小児放射線学会、2006. 6. 16-17、東京
 - 15) 畑中政博、大谷祐之、田原和典、石丸由紀、池田 均：外科的切除を施行した胃粘膜下腫瘍の 2 例。第 33 回日本小児内視鏡研究会、2006. 7. 1、東京
 - 16) 森 健一、中井秀郎、佐藤 両、北原聡史、安田耕作、高瀬康雄、石丸由紀、池田 均：二分脊椎症青年期の尿路再建手術例の検討。第 23 回二分脊椎研究会、2006. 7. 1、松本
 - 17) Takayasu H, Nakazawa N, Montedonico S, Puri P. Reduced expression of aquaporin-5-water channel in nitrofen-induced hypoplastic lung with congenital diaphragmatic hernia rat model. The 53rd Annual International Congress of the British Association of Paediatric Surgeons, Stockholm, Sweden, July 18-21, 2006
 - 18) Takayasu H, Nakazawa N, Montedonico S, Puri P. Down-regulation of wnt signal pathway in nitrofen-induced hypoplastic lung. The 53rd Annual International Congress of the British Association of Paediatric Surgeons, Stockholm, Sweden, July 18-21, 2006
 - 19) Nakazawa N, Montedonico S, Takayasu H, Paradisi F, Puri P. Disturbance of retinol transportation causes nitrofen induced hypoplastic lung. The 53rd Annual International Congress of the British Association of Paediatric Surgeons, Stockholm, Sweden, July 18-21, 2006
 - 20) 大谷祐之、田原和典、石丸由紀、山岸純子、畑中政博、永井俊郎、中井秀郎、池田 均：鼠径ヘルニア手術を契機に発見された精巣性女性化症候群の同胞例。第 15 回日本小児泌尿器科学会総会、2006. 7. 21-22、新潟
 - 21) 中井秀郎、木原敏晴、石丸由紀、佐藤 両、森 健一、漆原正泰、新井 学、北原聡史、池田 均、安田耕作：Pippi Salle 法による膀胱頸部形成術の臨床的意義。第 15 回日本小児泌尿器科学会総会、2006. 7. 21-22、新潟
 - 22) 木原敏晴、中井秀郎、石丸由紀、山岸純子、池田 均、安田耕作：両側性巨大腎芽腫に対する腎温存手術の経験。第 15 回日本小児泌尿器科学会総会、2006. 7. 21-22、新潟
 - 23) 設楽利二、丸山健一、鈴木則夫、濱崎祐子、坂井智行、池田昌弘、有安大典、長谷川行洋、小川哲史、池田 均：腎不全を発症した腎芽腫（Drash 症候群）の 2 例。第 1 回腎芽腫臨床研究打ち合わせ会、2006. 7. 29、東京
 - 24) 中井秀郎、木原敏晴、新井 学、北原聡史、安田耕作、山岸純子、石丸由紀、田原和典、池田 均：両側性巨大腎芽腫に対する腎温存手術。第 1 回腎芽腫臨床研究打ち合わせ会、2006. 7. 29、東京

- 25) 池田 均：腎芽腫における腎温存手術。第1回腎芽腫臨床研究打ち合わせ会、2006. 7. 29、東京
- 26) 池田 均：多施設共同研究における横紋筋肉腫の外科治療に関する研究の提案。平成18年度厚生労働省がん研究助成金森川班第1回班会議、2006. 7. 29、東京
- 27) 畑中政博、大谷祐之、田原和典、石丸由紀、池田 均：噴門形成術後に壊死性腸炎を発症した1例。第802回外科集談会、2006. 9. 9、東京
- 28) 鈴木 信、加藤元博、南谷泰仁、山本 豪、高橋 篤、池田 均、桑野博行、小川誠司、林 泰秀：高密度オリゴヌクレオチドアレイを用いた肝芽腫におけるゲノム異常の網羅的解析。第65回日本癌学会学術総会、2006. 9. 28-30、横浜
- 29) 石丸由紀、畑中政博、大谷祐之、田原和典、池田 均：先天性胆道拡張症ならびに膈管胆道合流異常症に対する治療経験。第29回日本膈管胆道合流異常研究会、2006. 10. 6-7、徳島
- 30) Takayasu H, Nakazawa N, Sugimoto K, Sato H, Montedonico S, Puri P. Impaired alveolar epithelial cell differentiation in the hypoplastic lung in the nitrofen induced congenital diaphragmatic hernia. The 19th International Symposium of Paediatric Surgical Research, October 26-29, 2006, Florence, Italy
- 31) Nakazawa N, Takayasu H, Montedonico S, Puri P. Altered regulation of retinoic acid systems in nitrofen-induced hypoplastic lung. The 19th International Symposium of Paediatric Surgical Research, October 26-29, 2006, Florence, Italy
- 32) 畑中政博、大谷祐之、田原和典、石丸由紀、池田 均：噴門形成術後に壊死性腸炎を発症した1例。第41回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2006. 10. 28、東京
- 33) 田原和典、畑中政博、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：腸回転異常症・中腸軸捻転の術後にHirschsprung病を診断した1例。第41回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2006. 10. 28、東京
- 34) 大谷祐之、畑中政博、石丸由紀、田原和典、池田 均：膀胱自然破裂による汎発性腹膜炎を生じた重症心身障害児例。第43回埼玉県小児外科症例検討会、2006. 11. 7、川越
- 35) 田原和典、大谷祐之、畑中政博、山岸純子、石丸由紀、池田 均：ダウン症候群・血小板減少(TAM)を合併した十二指腸閉鎖症の一例。第68回日本臨床外科学会総会、2006. 11. 11
- 36) Takayasu H, Sato H, Sugimoto K, Montedonico S, Puri P. Down-regulation of Wnt2 and GATA6 in the heart of nitrofen-induced diaphragmatic hernia in rats. The 20th Congress of Asian Association of Pediatric Surgeons, November 11-15, 2006, New Delhi, India
- 37) Takayasu H, Nakazawa N, Montedonico S, Puri P. Down-regulation of GATA6 in nitrofen-induced hypoplastic lung. The 20th Congress of Asian Association of Pediatric

Surgeons, November 11-15, 2006, New Delhi, India

- 38) Nakazawa N, Takayasu H, Puri P. Altered gene expression of retinoid receptors in nitrofen induced hypoplastic lungs. The 20th Congress of Asian Association of Pediatric Surgeons, November 11-15, 2006, New Delhi, India
- 39) 池田 均、石丸由紀、田原和典、大谷祐之、畑中政博、高安 肇：瘻孔をともなう肛門狭窄：肛門管重複症かと議論した1例。第63回直腸肛門奇形研究会(PSJM2006)、2006.11.16、香川
- 40) 大谷祐之、田原和典、畑中政博、石丸由紀、池田 均：小児の尿管管遺残症に対する腹腔鏡下切除術の経験。第26回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会(PSJM2006)、2006.11.16-17、香川
- 41) 石丸由紀、畑中政博、大谷祐之、田原和典、池田 均：先天性胆道拡張症ならびに臍管胆道合流異常症に対する治療経験。第22回日本小児外科学会秋季シンポジウム、2006.11.18、高松
- 42) 設楽利二、丸山健一、鈴木則夫、濱崎祐子、坂井智行、池田昌弘、有安大典、長谷川行洋、池田 均：ウィルムス腫瘍発症時に尿異常なく、治療終了後に腎不全を来したDrash症候群の1例。第22回日本小児がん学会、2006.11.24-25、大阪
- 43) 福澤正洋、池田 均：小児がん全数把握登録事業：開始の経緯と現状。第22回日本小児がん学会、2006.11.24-25、大阪
- 44) 池田 均：小児がん全数把握登録事業の今後について。第22回日本小児がん学会、2006.11.24-25、大阪
- 45) 設楽利二、丸山健一、鈴木則夫、小川哲史、池田 均：Drash症候群の2例。平成18年度群馬医学会、2006.12.2、前橋
- 46) 畑中政博、石丸由紀、田原和典、大谷祐之、池田 均：消化管出血の原因となった平滑筋肉腫の2例。第99回東京小児外科研究会、2006.12.5、東京

「症例提示」

- 1) 山岸純子：両側Wilms腫瘍の一例。第6回病院CPC、2006.2.27、越谷病院
- 2) 大谷祐之：貧血を契機に発見された胃腫瘍の1例。第17回関東小児外科症例検討会、2006.3.18、東京
- 3) 山岸純子：両側Wilms腫瘍の一例。第81回CPC、2006.3.27、医大センター棟4階大会議室、壬生
- 4) 大谷祐之：噴門形成術後に壊死性腸炎を発症した1例。第18回関東小児外科症例検討会、2006.9.16、東京

「座長・当番幹事」

- 1) 池田 均：日本小児肝臓スタディグループ研究会 2006、「合併疾患・まれな症例」座長、2006. 1. 27、東京
- 2) 池田 均：第 12 回群馬小児がん研究会、「一般演題」座長、2006. 2. 10、前橋
- 3) 池田 均：第 19 回日本小児脾臓研究会、「一般演題 1」座長、2006. 3. 4、東京
- 4) 池田 均：第 1 回埼玉県東部地区小児救急医療研究会、当番幹事、2006. 3. 10、越谷
- 5) 池田 均：第 43 回日本小児外科学会総会、「口演、腫瘍 1」座長、2006. 6. 9、秋田
- 6) 石丸由紀：第 124 回埼玉小児科学会埼玉地方会、一般演題座長、2006. 6. 18、さいたま
- 7) 石丸由紀：第 41 回日本小児外科学会関東甲信越地方会、「小腸 1」座長、2006. 10. 28、東京
- 8) 池田 均：第 63 回直腸肛門奇形研究会、「要望演題 I、重複肛門の典型例」座長、2006. 11. 16、香川
- 9) 池田 均：第 22 回日本小児がん学会、小児がん登録キャンペーンシンポ「小児がん登録の現状と分析、そしてこれから」座長、2006. 11. 24-25 (25)、大阪
- 10) 池田 均：第 99 回東京小児外科研究会、当番世話人 2006. 12. 5、東京
- 11) 池田 均：獨協医科大学越谷病院褥瘡対策委員会講演会、「褥瘡局所治療ガイドラインについて（講師：大塚 勤教授）」座長、2006. 12. 9、越谷

3. 研究助成

- 1) がんの子供を守る会平成 18 年度小児がん治療研究助成、「腎芽腫における腎温存手術の実施可能性と長期的有用性に関する前方視的グループ研究」(研究代表者、池田 均)、700,000 円
- 2) 平成 18 年度厚生労働省がん研究助成金、「小児横紋筋肉腫に対する中央病理診断および遺伝子診断にもとづく臨床試験の確立と新規治療開発に関する研究」(分担研究者、池田 均)、1,600,000 円
- 3) 獨協医科大学研究助成金、「新生仔ラットを用いた傷害小腸再生の検討」(主任研究者、田原和典)、1,000,000 円

4. 受賞

- 1) 池田 均：平成 18 年度関湊賞、「腎芽腫 (Wilms 腫瘍) における腎温存手術の実施可能性と有効性、ならびに WT1 遺伝子異常の及ぼす影響に関する前方視的グループ研究」、研究助成額 2,000,000 円

5. 学位 該当者なし

V 教育関連の活動

1. 学生実習

医学部5年生を対象としたbedside learning (BSL)を担当した。Clinical clerkship (CCS)とも言うべき診療参加型の実習であり、朝8時30分のミーティングから診療終了時刻まで学生は担当医とともに過ごした。担当医は病歴聴取、診察、検査、手術（術前準備から術後管理まで）、診療記録の記載などの基本とその実際を指導した。学生は可能な限り緊急手術にも立ち会い、外来診療、回診、カンファレンス、症例検討会などを通じ小児外科疾患の病態、診断、治療に関する基本的知識が得られるよう、さらにチーム医療の実際を体験できるよう教育内容に配慮した。学生には個別にテーマを与え、学習した内容を短時間でプレゼンテーションする機会も与えた。

2. 卒後臨床研修

1年目の初期研修医3名が外科選択科目として1カ月間の小児外科臨床研修を行った。研修は越谷病院臨床研修プログラムに従い実施された。

3. 講演・講義

- 1) 池田 均：「低出生体重と肝芽腫：疫学研究から基礎研究へ」、平成17年度関東甲信越地区小児がん登録研究会、2006.2.25、東京
- 2) 池田 均：「消化管の発生と小児外科」、獨協医科大学講義(2年生)「消化・吸収・栄養の科学」、2006.6.15、壬生
- 3) 池田 均：「小児がん：遺伝子病態とその臨床」、群馬大学総合病態外科学実践臨床病態学講義(6年生)、2006.9.5、前橋
- 4) 池田 均：「こどもの事故」、埼玉YMCA、2006.10.23、所沢

4. セミナーの開催

小児外科および関連領域の最新の情報を得ることを目的に、院内外の医師、看護師、コメディカル、学生を対象に小児外科・周産期外科セミナーを開催した。実施セミナーは以下のとおりである。

- 1) 第28回小児外科・周産期外科セミナー

講師：埼玉県立小児医療センター血液腫瘍科部長、花田良二先生

演題：「小児悪性腫瘍の治療の経験」

2006. 1. 13、獨協医科大学越谷病院

2) 第 29 回小児外科・周産期外科セミナー

講師：千葉大学小児外科講師、松永正訓先生

演題：「小児悪性固形腫瘍：一小児外科医の挑戦」

2006. 3. 17、獨協医科大学越谷病院

3) 第 30 回小児外科・周産期外科セミナー

講師：大阪府立母子保健総合医療センター小児外科医長、川原央好先生

演題：「胃食道逆流症とはどんな病気？どのように治療したらよいでしょうか？：胃食道逆流症における消化管運動異常とその治療戦略」

2006. 3. 31、獨協医科大学越谷病院

4) 第 31 回小児外科・周産期外科セミナー

講師：大阪府立母子保健総合医療センター泌尿器科部長、島田憲次先生

演題：「周産期泌尿器科、とくに小児外科との接点」

2006. 7. 28、獨協医科大学越谷病院

5) 第 32 回小児外科・周産期外科セミナー

講師：獨協医科大学第一外科教授、藤原利男先生

演題：「獨協医科大学第一外科における小児外科の経験（新生児外科を中心に）」

2006. 12. 19、獨協医科大学越谷病院

5. 小児外科・病理カンファレンス

小児外科と病理のカンファレンスを開催した。

1) 第 16 回小児外科・病理カンファレンス、2006. 1. 6

(1) 8 歳、女児、卵巣奇形腫

(2) 11 歳、女児、乳房線維腺腫

(3) 4 歳、男児、胃異所性膵

(4) 1 歳、男児、腎芽腫

(5) 4 歳、男児、正中頸嚢胞

(6) 1 歳、男児、後頸部腫瘤

(7) 14 歳、女児、骨盤悪性リンパ腫

(8) 11 歳、男児、石灰化上皮腫

2) 第 6 回病院 CPC、2006. 2. 27

- (1) 1歳、男児、腎芽腫
- 3) 第17回小児外科・病理カンファレンス、2006.6.30
 - (1) 7歳、女児、縦隔ユーイング肉腫
 - (2) 9カ月、女児、ヒルシュスプルング病
 - (3) 6カ月、男児、ヒルシュスプルング病
 - (4) 2歳、男児、肉芽腫性リンパ節炎
 - (5) 4カ月、男児、ヒルシュスプルング病
 - (6) 10カ月、男児、結腸重複症
 - (7) 1歳、男児、精巣奇形腫
 - (8) 2歳、精巣女性化症候群
 - (9) 2歳、男児、壊死性腸炎
- 4) 第18回小児外科・病理カンファレンス、2006.12.8
 - (1) 2歳、男児、壊死性腸炎
 - (2) 15歳、女児、咽頭原発癌腫
 - (3) 5歳、男児、メッケル憩室
 - (4) 2歳、男児、精巣卵黄嚢腫瘍
 - (5) 3カ月、女児、乳児肝炎
 - (6) 10歳、女児、膀胱破裂
 - (7) 11カ月、男児、結核性肉芽腫

6. 抄読会

2006年は42回(抄読論文数75)の抄読会を行った。

VI その他

- 1) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、42(1), 2006.
- 2) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、42(2), 2006.
- 3) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、42(4), 2006.
- 4) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、42(5), 2006.
- 5) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、42(6), 2006.
- 6) 池田 均：「あとがき」。日小外会誌、42(7), 2006.
- 7) 池田 均：「小児外科をご存知ですか」。東京新聞栃木版、2006. 4. 21
- 8) 池田 均：「低出生体重児における肝芽腫発生の機序に関する研究(15591892)」、平成15年度－平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書、2006年5月
- 9) 池田 均：「小児外科をご存知ですか」。獨協医科大学学内だより、383:19、2006. 6月
- 10) 池田 均：「特別寄稿」。群馬大学第一外科同門会報第34号、pp43-44、2006. 6月
- 11) 石丸由紀：「赤ちゃんの病気ガイド、Vol. 81、下痢」。ひよこクラブ、Benesse、2006. 5月号
- 12) 石丸由紀：医局紹介「越谷病院小児外科」、獨協医大同窓会新報、2006. 11. 22

付.

「第1回埼玉県東部地区小児救急医療研究会」開催案内

「第99回東京小児外科研究会」プログラム

平成 18 年 2 月 吉日

「第 1 回埼玉県東部地区小児救急医療研究会」開催のご案内

謹啓

初春の候、先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さてこの度、埼玉県東部地区の小児救急医療の発展、向上を目的に「第 1 回埼玉県東部地区小児救急医療研究会」を開催する運びとなりました。つきましては是非ともご出席頂き、活発にご討論頂ければと考えております。

謹白

記

日 時：平成 18 年 3 月 10 日（金） 19 時 30 分～21 時 00 分

会 場：越谷コミュニティーセンター（サンシティーホール）

越谷市南越谷一丁目 2876 番地 1 TEL：048（985）1111

参加費：無料

I. 製品紹介 19 時 30 分～

「 点滴静注用セフェム系抗生物質製剤 ブロアクト 」

II. 特別講演 19 時 45 分～

座長：獨協医科大学越谷病院 小児外科 教授 池田 均 先生

「小児救急医療の集約化と拠点病院の役割」

船曳哲典先生（藤沢市民病院 小児科部長）

尚、軽食をご用意させて頂く予定です。

共催：埼玉県東部地区小児救急医療研究会

塩野義製薬株式会社

連絡先 塩野義製薬株式会社

電話 048（662）4861

第99回 東京小児外科研究会

日 時：平成18年12月5日（火）18：00～

場 所：東京商工会議所 7階 国際会議場

東京都千代田区丸の内3-2-2

電話：03（3283）7500

当番世話人：池田 均（獨協医科大学越谷病院 小児外科）

* 参加費としておひとり1,000円を徴収させていただきます。

* 演題発表4分、質疑応答2分といたしました。

* 軽食を準備しております。



共 催：東京小児外科研究会

エーザイ株式会社

第99回 東京小児外科研究会

主 題：『小児の消化管腫瘍および腫瘍性病変』

I. 演題

18:00～18:20 <胃奇形腫>

1. 小胃症を伴った胃未熟奇形腫の1例

聖路加国際病院 小児外科

中村 晃子、松藤 凡、荒木 夕宇子

2. 胃奇形腫の2例

聖マリアンナ医科大学 小児外科

浜野 志穂、北川 博昭、脇坂 宗親、島 秀樹

3. 再発をみた胃奇形腫の新生児例

筑波大学 小児外科

渡邊 美穂、金子 道夫、堀 哲夫、小室 広昭、瓜田 泰久、
工藤 寿美

18:20～18:40 <腸重積症を発症した腫瘍病変>

4. 腸重積で発症したmyoepithelial hamartomaの1例

埼玉県立小児医療センター 外科

芳田 真理子、北野 良博、内田 広夫、四本 克己、五藤 周、
石丸 哲也

5. 腸重積を繰り返したPeutz-Jeghers症候群の兄弟例

山梨県立中央病院 小児外科

大矢知 昇、岩下 公江、久保 雅子

6. 腸重積症で発症した回盲部腫瘍の3例

近畿大学 外科（小児外科部門）

吉田 英樹、八木 誠、吉田 洋、野上 隆司、

18:40～19:00 <悪性リンパ腫>

7. 胃原発バーキットリンパ腫の1例

埼玉医科大学 小児外科

米川 浩伸、村岡 いづみ、佐竹 亮介、檜 顕成、高橋 浩司、
谷水 長丸、大野 康治、里見 昭

8. 蛋白漏出性胃腸症を伴いリンパ腫を先進部とした腸重積症の1例

日赤医療センター 小児外科

大沢 一記、尾花 和子、石田 和夫

9. 虫垂炎を呈した回盲部悪性リンパ腫の1例

山梨大学 第二外科

蓮田 憲夫、高野 邦夫、荒井 洋志、大矢知 昇、毛利 成昭

腰塚 浩三、松本 雅彦

19:00~19:30 <間葉系腫瘍とGIST>

10. 胎児期に消化管穿孔を来した空腸線維肉腫の1例

東京大学 小児外科

杉山 正彦、金森 豊、古村 眞、中原 さおり、佐藤 かおり

岩中 督

11. 腸重積症を来した乳児大腸線維肉腫の1例

東海大学 小児外科、同病理診断学

檜 友也、上野 滋、平川 均、安田政実

12. 消化管出血の原因となった平滑筋肉腫の2例

獨協医科大学越谷病院 小児外科

畑中 政博、石丸 由紀、田原 和典、大谷 祐之、池田 均

13. グリベック投与により長期緩解を得ている進行GISTの1例

群馬県立小児医療センター 外科

黒岩 実、西 明、土岐 文彰、鈴木 則夫

14. 当科小児 GIST の経験および成人／小児例の文献的考察による比較検討

順天堂大学 小児外科

林 豊、岡崎 任晴、小林 弘幸、山高 篤行

19:30~19:55 <その他の腫瘍・腫瘍性病変>

15. 出血を繰り返し治療に難渋した十二指腸粘膜下腫瘍の1例

東海大学 小児外科

平川 均、上野 滋、檜 友也

16. 消化管血管腫をすべて切除した blue rubber bleb nevus syndrome の1例

北里大学 外科

江間 玲、田中 潔、武田 憲子、渡邊 晶彦

17. 小児大腸癌の1例

群馬大学 病態総合外科（第一外科）

藤永 恵美子、高橋 篤、鈴木 信、浅尾 高行、桑野 博行

18. Anal tonsil の1例-治療は？

獨協医科大学 第一外科

岩谷 さおり、藤原 利男、土岡 丘、薄井 佳子、砂川 政勝

19:55~20:00 休憩

20:00~20:45

II. 特別講演

「小児間葉系腫瘍の病理 - その分類と分子生物学的態度 - 」

九州大学大学院医学研究院 形態機能病理学 教授

恒吉 正澄 先生

20:45~20:55

III. 東京小児外科研究会 次回日程・主題報告、次々回当番世話人推薦

<演題発表時間・注意事項>

1. 演題発表時間 4分、質疑応答 2分とさせていただきます。

PC発表はノートパソコンの持ち込みに限らせていただきます。バッテリー切れ
とならないよう

コンセント用電源アダプターをご持参ください。モニタ出力端子はDsub-15ピン
となります。

2. 小冊子作成のため、要旨を 2,000 字程度、図表 3 枚までにまとめて、発表当日又
は 1 ヶ月以内に

当番世話人宛にお送りください。

(FD、MO、CDにてご提出ください。抄録はテキスト形式、画像はJPG形式(解像度
200以上)で

お願いいたします。)

当番世話人：獨協医科大学越谷病院 小児外科 池田 均

〒343-8555 埼玉県越谷市南越谷 2-1-50

Tel : 048-965-1111 / Fax : 048-965-8927

編集後記

2006 年春、第 1 回埼玉県東部地区小児救急医療研究会を開催した。1 年以上をかけて準備し、研究会の開催にこぎ着けることができた。当初から相談に乗っていただいた先生方や幹事の先生方には心より感謝申し上げたい。参加者は 40 名程度であったが、講演では藤沢市における小児救急医療体制作りの先駆的な試みをお聴きすることができた。本研究会が埼玉県東部地区における小児救急医療ネットワーク作りの足がかりとして、より良い医療環境の整備に役立てばと願っている。暮れには東京小児外科研究会を担当した。「小児の消化管腫瘍および腫瘍性病変」を主題に開催し、多数の応募演題をいただいた。特別講演も企画することができ、これもまた心より感謝している。

2007 年はより一層の飛躍の一年にと願うが、目標を見失うことなく不断の努力を続けること、これは言うに容易であるがなかなか大変なことである。

(池田)